顧客のニーズを起点とした農業経営
～品目ありきの農業経営から脱却～

豊橋市　　内藤 貴教さん（(株)サンリーフ）
施設野菜（コマツナ）

【平成 26 年 6 月 19 日掲載】

豊橋市で大規模にコマツナを生産する農業法人「(株)サンリーフ」の代表取締役内藤貴教さんを紹介します。内藤さんは、顧客のニーズに基づいた作目の選択と効率的な生産管理により就農から10年で年商１億円を実現しています。平成25年度には、その経営手腕が評価され中日農業賞の優秀賞を受賞されています。

儲かる農業を目指して

内藤さんの就農前、実家ではハウスキュウリと露地野菜を大規模に経営していました。父親の勧めもあり、高校卒業後は、種苗会社や全国の優良な農業法人で研修生として働きながら、農業経営や野菜栽培の基礎を学びました。特に農業法人では、経営者宅での住込みの研修であったため、儲かっている法人の販売手法、雇用管理や緻密な経費の算出方法などを間近で学ぶことができたそうです。

２年半の研修を終えて平成 14 年に就農した内藤さんでしたが、「今の経営を続けていたのでは、家族経営の中で出荷に追われ、十分な利益も見込めない。」と自らが理想とする「儲かる農業」とのギャップに悩んでいました。ただ、就農したばかりで地域の農業の仕組みも分からなかったことから父親のもとで研鑽をつむことを選びました。

収穫を間近に控えたコマツナと内藤貴教さん

需要を起点とした品目の転換

父親のもとで働きながら常に次の品目を模索していた内藤さんは、儲かっている法人が扱う品目の条件を次のように分析していました。①. 年間をとおした需要がある、②. 女性など力のない雇用者でも扱える、③. 暖房を使用しない。このような条件から「葉物野菜が良いのでは」となんとなく思っていたそうですが、実際に何を栽培すべきなのか迷っていたそうです。

ちょうどその頃、知人を介して知り合った仲卸業者から「この販売単価でコマツナを栽培してみないか」と提案がありました。その当時、コマツナは関西方面ではメジャーな葉物野菜ではなく、値段次第では新たな需要を作り出せると仲卸業者は考えていました。仲卸業者の考えに共感した内藤さんは、年間の作付け回数から必要な経費を算出します。そして、提示された販売単価から十分な利益が出ることを確信します。その後、何度も練り直した事業計画書を父親に提示し、「２年間やってダメならキュウリをつくる。」と品目の転換を直談判します。内藤さんの熱意にほだされる形で、平成 17 年にキュウリをすべてコマツナに転換しました。

経営における作業工程及び雇用の管理

１年目こそ発芽の段階で失敗し、計画通りの出荷ができなかった内藤さんですが、２年目以降はかん水方法や温度管理を見直し、発芽を揃えることができました。さらに、収穫後の耕起方法についても改良を重ね、土壌診断データに基づいた肥培管理を行うことで、生育が揃い、目標としていた一斉収穫を実現させます。これによりハウス毎の工程管理が容易になり、ハウスの効率的な利用と雇用者の計画的な配置が可能となりました。

生育をそろえて、一斉に収穫できるかどうかが、
雇用を用いたコマツナ経営のポイントとなっている。

また、内藤さんは、通常は４条播きのは種機を倍の８条播きに改良したり、出荷場の限られたスペースで多くの作業者がストレスなく作業できるようにオリジナルの回転式調整台を設置するなど、常に作業工程の改善を図ってきました。こうした経営努力が実り、当初は 50ａでスタートしたコマツナ経営が、８年経った現在では専作となり、270ａにまで拡大しています。

これだけ大きくなった内藤さんの経営において雇用者の管理は、非常に大きなウェイトを占めています。コマツナの栽培では、年間を通じて一定量の仕事がありますが、夏場は生育が早く作業が集中してしまいます。そこで、内藤さんは、夏場に必要な労働力の1.5倍程度のパート従業員を登録して、労働力の不足に備えています。また、これによりパート従業員も自分の都合に合わせた働き方を選択することが可能となっています。

計量と袋詰めに利用する調整台（左）と梱包用の受け皿（右）は、回転することによって一箇所に荷物が滞留することを防いでる。
（矢印は出荷物の進行方向）

地域農業を守る

内藤さんは、「今のペースで高齢化が進むと、耕作放棄地は一気に増加する。現在の担い手が従来どおりの家族経営を続けていては、地域の農地は維持できない。」と地域農業の行く末を案じています。「担い手一人ひとりが、企業的な農業経営を行う必要がある。」と仲間と共に地域農業に関するＮＰＯ法人を立ち上げ、外部講師を招いて勉強会を行っています。

経営面積 270a のうち、約 150a のハウスが集まる豊橋市のほ場。今年に入ってから 70ａのハウスが新設された。

最後に「やる気のある担い手が農業をかっこいい産業にして、それに続く担い手達でこの地域を元気にすることが理想」と内藤さんの描く地域農業の姿を語ってくれました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：東三河農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2014, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.